



春の祭典

安部 花子

3月23日、田町リーブラにて春の祭典に参加しました安部と申します。例年実施しているマースレニツァですが、今年は少し時期がずれてしまったため春到来のお祝いとして「春の祭典」を開催いたしました。

春を祝う習慣は、日本の春分の日と同じように中央アジア地域でも「ノウルーズ」という国家の祝日になっており、今年はロシア国内だけでなく中央アジア地域の歌や踊り、北欧や中東の楽器とのコラボレーション演奏も楽しめる、とても多様性に富んだ個性あふれる催しとなりました。

祭典の始まりは、チェチェンの祝祭の踊り「ダイモク」からスタートです。「故郷」という意味の気高い山岳民族の精神性を体現した力強い舞踊で、観客はその世界観にグッと引き込まれます。出演は、北コーカサス諸国の伝統舞踊レズギンカのアジア圏における第一人者である野崎大我氏と、野崎氏と同じく民族アンサンブル「ロアム」のメンバーであるアゼルバイジャン出身のオリエンタルダンサー、ディララ・ガジェワ氏。指先の動きにまで注意が払われた振付やステップは、まるで美の神様が出演者の体を借りて動いているように



も見えて、息をのむほどの神秘性すら感じさせます。

最初の演目からかなりレベルの高い芸術を目の当たりにした我々でしたが、その後も

見るものを釘付けにしてしまうような様々な国や民族の素晴らしい作品が続きます。伝統衣装を身にまとったロシアの舞踊「カリンカ」「モスクワのカリドール」澄んだ歌声で観客を魅了するロシアの名曲「アフトゥイ」「カチューシャ」、エキサイティングなコサック剣舞や臨場感あふれるウズベキスタンやダゲスタンの舞踊、スウェーデンやアラブの民族楽器とコラボした多様性あふれるチェチェンの楽器演奏、民族舞踊家の女性3名による目にも華やかな美しいウズベキスタン舞踊——。ロシアという国がいかに多くの民族・文化を内包した国であるかを改めて思い知らされます。一部の地域を除き、ほぼ単一的な民族構成である日本において多様性とともにもどう歩んでいくべきか、ロシアから学ぶことは非常に多いのではと感じました。

ホールでのコンサート終了後、調理室に移動しみんなで軽食を食べながらの懇談会。岩橋さんお手製のサリヤンカと、私が早朝から拵えたブリヌイ100枚、その他お菓子や軽食を出演者と観客の皆様に分ります。美味しいものを食べながらの和気あいあいとした雰囲気の中、なんと春の祭典・第二弾が勃発。観客との距離が1メートルもないなか、同じ目線で出演者の皆様が舞い踊り、それを間近で見えて歓声を上げる観客たち。素晴らしい舞台設備がゆえ、ホールでは心なしか緊張した雰囲気もあり出演者と観客の距離が少し遠い様子でしたが、ここではお構いなし。出演者と観客の垣根が取り払われ、リラックスした雰囲気の中、同じ目線で和気あいあいと大いに騒ぎ楽しんでおられました。これは昨年マースレニツァでは見られなかった現象で、ゲリラパフォーマンスも得意とする出演者面々の面目躍如といった様子。名残惜しい雰囲気の中で解散となり、今年の春のお祝いも大成功に終わり、がんばって下準備した我々ボランティアの努力も本当に報われました。また来年も、嬉しいサプライズが連発するような春のお祝いを開催できたらいいなと思います。